



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2019年 10月号

「生きる真実な希望について」

牧師・園長 長村亮介

希望は心の中にとまる
羽根のあるもの

歌詞のないうたを轉り
決して休むことはない

風の日にもとても優しく聞こえる

こんなに大勢を慰める

この小鳥を当惑させる風は

よほど不機嫌にちがいない

わたしはそれを寒い土地や

見知らない海で聞いたことがある

けど今までどんなにつらくても

わたしにパン屑をねだったことがない

(エミリー・ディキンソン 訳：新倉俊二)

エミリー・ディキンソンは一八三〇年、北米マサチューセッツ州アマストに生まれ、南北戦争の頃を生きた、女性詩人の原型(新倉俊二)となった人です。彼女は生涯の間に一七七五篇の詩を書きましたが、そのほとんどが生前には発表されず、没後に彼女の部屋の引き出しから発見されました。彼女は三十三歳頃から、白いドレスを着て、家に引き籠もるような生活をしていたそうです。当時の時代背景を考えると、それが彼女にとって、詩作に生きる自らの決意だったのかも知れません。

希望とは何でしょうか。手許の辞書を引くと「ある事を成就させようと願う望むこと。また、その事柄。のぞ

み。」とあります。しかしこの詩にある希望は将来への願いと異なり、すでに心の中に在るもので、私たちが生きる上で支えとなるようなもののようです。

彼女はこの詩の最後を「わたしにパン屑をねだったことがない」と結んでいます。所謂、将来の願いを成就させる希望には、とても多くの忍耐が必要です。希望というのは大変な忍耐の大食漢ではないかと私には思われます。ただ使徒パウロは「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(ロマ五・三〜五)と教えているので、忍耐することで切り拓かれる将来があることも事実です。しかし、エミリーの言っている希望というのは、酷く不機嫌な風に当惑しながらも、私たちが優しく慰めると言うのです。ですからこの希望は、私たちの心の中にいるものでありながら、私たちの心とはまた異なるものです。私たちが諦めると無くなってしまおうというものではなく、むしろ、私たちが人生を諦めかけた時にこそ、この小鳥は私たちに諦めることなく轉り続け、私たちが癒やし慰めて、力をくれるのです。しかもその代償にパン屑さえも求めないと言うのです。

私はこの希望は神さまの聖霊ではないかと思えます。聖霊は、主イエスが私たちの罪や弱さの代償として十字架で死んでくださったことを思い起こさせて下さいます。その時、聖霊は小鳥の轉りのように、不機嫌な風に当惑する、私たちには小さなものに聞こえるとしても、私たちが癒やし慰めて、そこから前を向くことができるようにして下さいのではないのでしょうか。その意味でこの小鳥は、エミリーの言う通り、私たちの信じる、永遠に変わることはない、真実な生きる希望なのだと思えます。

(参考：『ディキンソン詩集』新倉俊二訳編 思想社)

Ω

平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園
2019年 10月号